プラトン『国家』Ⅴ巻の「二世界説」問題

――知られる世界と思わくされる世界が別個にある？――

太田和則

1．はじめに

プラトンはその中期著作『国家』のⅤ巻において、知識（エピステーメー）と思わく（ドクサ、思うこと）の区別をめぐり、「二世界説」（Two Worlds Theory）と呼ばれる奇妙な説を認めていたと見なされることがある。

「二世界説」は、プラトン自身の用語ではない。これは、『国家』Ⅴ巻の解釈に取り組む近年の学者たちが、一般に次のような説の名称として便宜的に用いている言葉である。すなわち「二世界説」とは、知識の対象はイデアだけであり、思わくの対象はイデアを分有する感覚的・個別的な事物だけである、とする説である(1)。知識と思わくのいかなる対象も同一でありえないとする点で、知られるイデアと思わくされる感覚的・個別的な事物の総体が言わば二つの「世界」として別個にある、とする説と言ってもよいだろう。

『国家』Ⅴ巻の伝統解釈において、プラトンはこうした「二世界説」を認めていたと見なされる傾向にあった。この用語自体が通用していたわけではないが、Ⅴ巻において知識と思わくは二つの「世界」と関連して区別されている、といった見方が、比較的古くから存在したことは確かである(2)。一方、「二世界説」という用語を最初に明確に持ち込んだのは、1978 年のFineの論文であろう。しかし、Fineはこれと 1990 年の論文において、プラトンがⅤ巻でこうした説を認めていたという見方には幾つかの問題があると指摘し、伝統解釈に反対する姿勢をとった。このFineの指摘は、以降に大きな影響をおよぼしたと考えられる。多くの学者が、Fineとは立場を異にしながらも伝統解釈を離れて、Ⅴ巻からの「二世界説」の（少なくとも、その問題の）解消を試みるようになったからである。こうした動向は、現在も続いていると言える(3)。

さて、本稿で私はまず、「二世界説」に関して中心的に議論されてきた『国家』Ⅴ巻のテクストの概要を示す（2 節）。その後で、ここでの「二世界説」の問題について理解を深めるため、上述の歴史・現状に関して三点を明確にすることを試みる。第一に、学者たちは伝統的にどのような解釈にもとづいて、プラトンが「二世界説」を認めていたと見なしてきたのか（3 節）。第二に、Fineは、こうした見方にどのような問題があると指摘したのか（4 節）。第三に、どうすれば「二世界説」は解消出来ると考えられているか（5 節）。

2．Ⅴ巻のテクスト

「二世界説」に関して中心的に議論されてきたのは、『国家』Ⅴ巻最終部 476e7-479e9（以下“Text”と略記）である。これから明らかにしていく事柄について理解しやすいよう、本節では、Text がⅤ巻の中で置かれている文脈とそのおおまかな内容を、あらかじめ見ておくことにしたい。

はじめに、文脈から。Ⅴ巻終盤でプラトンは、いわゆる「哲人王」の構想に対する人々の理解を得ることを目指し、王となるべき哲学者（ピロソポス）と「見物好き」（ピロテアーモーン）と呼ばれる類の、感覚的な教養を好む人々との違いを説明する。それによれば、哲学者と見物好きな類の人々は学習することを喜ぶ態度において似てはいるものの（475c6-e2）、哲学者には、＜美そのもの＞といったイデアへと向かって行きイデアをそれ自体として見ることができるのに対し、見物好きな類の人々には、美しい色や声といった感覚的・個別的なものは喜んでも、イデアの本性を見たり喜ぶことはできないという違いがある（476a9-c1）。続いてプラトンは、イデアと感覚的・個別的なものに対するこうした人々の態度の違いに直結させて、知識と思わくの区別を持ち出し、次のように論じる。――イデアとそれを分有する似像とを共に見ることができてそれらを混同しない人は知っており、その人の精神の様相は「知識」（グノーメー）であるが、イデアを認めず誰かがイデアの認識に向かって導いてくれるのにもついて行けない人は思わくしており、その人の精神の様相は「思わく」（ドクサ）である（476c2-d7）――。これによってプラトンは、哲学者は知っていて思わくしておらず、見物好きな類の人々は思わくしていて知っていない、ということを主張する。しかし彼は、この主張が、以上の議論だけでは見物好きな類の人自身に納得されない可能性を認める。そして、この主張がそうした人にも納得されるように、「なだめておだやかに説得する」試みを始める（476d8-e6）。

次に、Text の内容を見よう。プラトンはここで、次のＡ～Ｄのステップによって知識と思わくを区別し、最終的に再び、哲学者は知っていて思わくしておらず、見物好きな類の人々は思わくしていて知っていない、という主張を提出することになる。

Ａ．知識（エピステーメー）と無知（アグノーシアー）はそれぞれ（全くの[(4)]）＜あるもの（ト・オン）＞と（全くの）＜あらぬもの（ト・メー・オン）＞に対応する[(5)]。

Ｂ．知識と思わくは異なる能力であり、ゆえに異なるものに一意的に[(4)]対応する。思わくは＜あらぬもの＞に対応しないので無知とも異なり、知識と無知の中間に位置づけられる。そして、もし何かが＜ありかつあらぬもの＞ならば、思わくはそうしたものに対応する。

Ｃ．見物好きな類の人々が認める多くの美しいものは、＜ありかつあらぬもの＞の実例である。

Ｄ．以上Ａ～Ｃから、次の結論が得られる。――＜美そのもの＞のようなイデアを見る人々は知っていて思わくしておらず、多くの美しいものは見てもイデアを見ることはなくイデアに向かって導いてくれる人にもついて行けない人々は思わくしているものの何一つとして知ってはいない――。

以上をもう少し詳しく書くと、次の（１）～（１０）のようになる。Ａが（１）～（２）に、Ｂが（３）～（８）に、Ｃが（９）に、Ｄが（１０）に相当する。

（１）知っている人は＜あるもの＞を知っている。よって[7]、知識は＜あるもの＞に対応する（476e7-a9）。

（２）＜あらぬもの＞は知られえない。よって、無知は＜あらぬもの＞に対応する（476e10-a10）。

（３）もし何かが＜ありかつあらぬもの＞ならば、それは＜あるもの＞と＜あらぬもの＞の中間に位置する。その場合、知識と無知の中間のものがそれに対応する（477a6-b2）。

（４）能力とは、全てのものができる各々のことが、まさにそれによってできるという、そういうものである。例えば、視覚や聴覚は能力である。能力を区別する基準は、それが何に対応するか、何を成し遂げるか、ということだけである。同一のものに対応して配され同一のことを成し遂げるものを同一の能力と呼び、異なるものに対応して配され異なることを成し遂げるものを異なる能力と呼ぶ（477c1-d6）。

（５）知識も思わくも能力である。知識は誤りえないが、思わくは誤ることもあるから、知識と思わくは異なる能力である（477d7-478a2）。

（６）よって、知識と思わくは異なるものに対応する。知識が＜あるもの＞に対応するので、思わくはそれ以外のものに対応する（478a3-b5）。

（７）思わくしている人は nothing（＝＜あらぬもの＞）ではなく何かを思わくしているので、思わくは＜あらぬもの＞以外のものに対応する（478b6-c2）。

（８）よって、思わくは＜あるもの＞にも＜あらぬもの＞にも対応しない。思わくは知識と無知の中間に位置し、＜ありかつあらぬもの＞に対応する（478c3-d4）。

（９）見物好きな類の人々が認めるような多くの美しいものはどれも、美しいと現れるばかりでなく、醜い（＝美しくない）とも現われる。多くの正しいものや敬虔な

もの、二倍のもの、半分のもの、大きいもの、小さいもの、重いもの、軽いものについても同様である。ゆえに、それらは＜あるもの＞と＜あらぬもの＞の中間に位置する。その意味で、多くの人々の、美しいもの等についての多くの習慣は、＜あるもの＞と＜あらぬもの＞の中間をさまよっている（478e7-479d6）。

（１０）よって、＜美そのもの＞のようなイデアを見る人々は知っているのであって思わくしてはいない。多くの美しいものは見てもイデアを見ることはなくイデアに向かって導いてくれる人にもついて行けない人々は、思わくしているものの何一つとして知ってはいない（479e1-9）。

3．伝統解釈と「二世界説」

本節では、Text の伝統解釈がどのようなものであり、それにおいてプラトンが「二世界説」を認めていたと見なされる傾向にあったのは何故か、という点を明らかにする。

「二世界説」に関して、Text の解釈の要点は二つあると言える。一つは、知識と思わくが一意的に対応する＜あるもの＞と＜ありかつあらぬもの＞とは何かということ。もう一つは、この場合の対応とはどのような関係かということである。

少なくとも 20 世紀半ば頃までの解釈[8]において、ここでの＜あるもの＞（ト・オン）等というギリシア語表現での「ある」（オン）は、それがいわゆるbe動詞に相当することから、「存在する」あるいは「（必ずしも明示されないものの、或る述語Pについて）Pである」のように翻訳されることが一般的であった。すなわち学者たちは、＜あるもの＞とは「存在するもの」あるいは「Pであるもの」のことであり、＜ありかつあらぬもの＞とは「存在しかつ存在しないもの」あるいは「PでありかつPであらぬもの」のことだと考えていた。また彼らは基本的に、この意味での＜あるもの＞とは実質的にイデアのことであり、＜ありかつあらぬもの＞とはイデアを分有する感覚的・個別的な事物のことである、と考えていた。

一方、「知識は＜あるもの＞に対応する」等の関係は、「知っている人は＜あるもの＞を知っている」のような関係に置き換えてよいと考えられ（前節（１）を参照）、「ある」の上記の翻訳との関連で、「知識は＜あるもの＞を対象（object）とする」のような関係として見なされることが一般的であった。つまり、知識はイデアを対象とし、これと平行して思わくは、感覚的・個別的な事物を対象とする、と考えられることが普通であった。

こうした伝統解釈によれば、Text では次のような主張が行なわれていることになる。――知っている人はイデアを知っている。思わくしている人は感覚的・個別的な事物を思わくしている――。しかしこの主張は、ここでの対応関係が一意的なものであり、イデアと

それを分有する事物が同一ではありえない以上、イデアについては知るしかなく、感覚的・個別的な事物については思わくするしかない、という主張に強く結びつくものであった。かくして、その意味でプラトンは、知識と思わくの対象から成る「二つの世界」の区別、つまり「二世界説」を認めていたと見なされる傾向にあったと言える。

4. 「二世界説」の問題点

しかし最初に見たように、Fine はこうした見方に問題があることを指摘した。本節では、その問題がどのようなものであったか、という点を明らかにする。

Fineの 1990 年の論文は、この点について特に詳しく論じている(9)。そこでのFineの主張を要約すると、次のようになる。もしプラトンが「二世界説」を認めていたとすれば、彼は以下の①②を支持していたことになる。

① 知識と思わくが同一の対象について成り立つことは不可能である。例えば、或るとき思わくしているまさにそのものを後から知るようになったり、或る人が思わくしているまさにそのものを同時に別の人が知っているということは不可能である。

② 知識の内容が感覚的・個別的な事物に言及することは不可能であるし、思わくの内容がイデアに言及することも不可能である。例えば、目の前のトマトについて、「このトマトはこれこれだ」と知っているということはありえず、＜美そのもの＞について、「＜美そのもの＞はしかじかだ」と思わくしているということはありえない。

Fine の主張によれば、①②について、次の三つの問題を考えられる。第一に、こうした認識観は反直感的な性格を持つものである。第二に、こうした認識観は、プラトン自身の幾つかのテクストの内容と齟齬をきたす（少なくとも、それらの箇所では異なった見解が支持されている）。例えば①については、『メノン』98a における思わくから知識への変化の説明や、『テアイテトス』201a-c において、或る事件の真相を知っている目撃者と思わくしているだけの裁判官が区別されることと、噛みあわない。②についても、同じ『国家』のⅥ巻 506c では、イデアについて知識なしに思わくを持つ可能性が認められており、Ⅶ巻 520c でも「洞窟の比喩」に関して、洞窟の外から戻ってきた哲学者が、洞窟内の囚人たちが思わくする多くの美しいものや正しいもの（＝感覚的・個別的な事物）に関する真実を既に見てしまっている、とされている。そして第三に、②は、2 節で見たような Text の文脈と関連して不自然である。ここでプラトンは、「哲人王」に対する人々の理解を得ようとしているのであり、その背景には、哲学者だけが知識を持ち、善き統治には知識が必要で

あるという考えがある。しかし、感覚的・個別的なものについては哲学者さえ他の人々と同様に思わくしか持たないのであれば、哲学者が少なくともこの感覚される世界の王として相応しいと考えるべき理由は不明になる。

5. 「二世界説」の解消

さて Fine は、こうした問題を指摘しつつ伝統解釈に反対する立場をとった。Text からの「二世界説」の問題の解消を目指すという点では、以来、多くの学者がこれに従っていると言える。本節では、この動向における特徴的な解釈の幾つかを紹介し、「二世界説」がどのように解消できると考えられてきたかを明らかにする。そのために、Fine の解釈、Gonzalez の解釈、岩田の解釈、の三つを順に紹介することにしたい。

5.1 Fine の解釈

Fineは、Textにおける＜あるもの＞等という表現の「ある」の翻訳を見直すことで、知識と思わくに関して区別されるのはそれらの対象でなく内容（content）だとし、それによって二世界説を解消しようとした（Fine, 1978, 1990[10]）。Fineの言う内容とは、「I know that…」や「I believe that…」におけるthat節の中身であり、特定の真理値を持つことができる命題のことである。

まず Fine は、一連の表現における「ある」を、伝統解釈のように「存在する」あるいは「P である」として翻訳すると、それだけで Text の議論が不適切になると主張する。主張の大筋は以下のようなものである。

――ギリシア語の「ある（オン）」には三つの異なる用法があり、それぞれ、「存在する」を示す存在的（existential）用法、「（或る述語 P について）P である」を示す述定的（predicative）用法、「真である」を示す真理表示的用法、である。存在的用法や述定的用法として「ある」を翻訳すると、＜あるもの＞と＜あらぬもの＞は確かに、伝統解釈のように知識と思わくの対象だと考えるのが自然になる。すなわち、＜あるもの＞と＜ありかつあらぬもの＞の区別は、知識と思わくの対象の区別になる。だがこの方針は、たとえ二世界説を別にしても、それ自体で Text の議論を不適切にする。何故なら、プラトンはここで、見物好きな類の人々が思わくしているだけであって知っているのではないということを、彼ら自身のために（「なだめておだやかに」）説得しようとしているからだ。Text がこうした文脈に置かれている以上、知識と思わくの対象がそもそも区別されるとか、思わくの対象は「存在しかつ存在しないもの」や「P でありかつ P であらぬもの」であるといった事柄を、相手が受け入れるべき前提としていきなり持ち込むのは不適切である（2 節（3）を参照のこと）

――。

このうえでFineが提案するのは、真理表示的用法として「ある」を翻訳する解釈である。つまり＜あるもの＞と＜ありかつあらぬもの＞は、「真であるもの」と「真でありかつ真であらぬ（＝偽である）もの」だということだ。この場合、「知識は＜あるもの＞に対応する」のような関係は「知識は＜あるもの＞を内容とする」のような関係となり、＜あるもの＞と＜ありかつあらぬもの＞の区別は、知識と思わくの内容の区別になる。

Fineによると、ひとまずこの解釈によれば、存在的用法や述定的用法として「ある」を翻訳する場合に生じるような不適切さは回避できる。理由として第一に、知識と思わくの対象の区別が前提として持ち込まれるわけではなくなるからである。そもそも、そうした区別は基本的にTextに登場しないことになるからだ。また第二に、思わくの内容が「真でありかつ偽であるもの」だというのは、見物好きな類の人々にも受け入れやすい事柄だと考えることが出来る。と言うのも、この場合に知識と思わくの内容として対応する「真であるもの」と「真でありかつ偽であるもの」は、それぞれ「真なる命題のみを要素とする集合」、「真なる命題も偽なる命題も要素とする集合」と見なすことができ、そうだとすれば、この二つの集合に関する知識と思わくの区別は、知識の内容は必ず真だが思わくの内容は必ずしも真ではないという分かりやすい区別になるからである。

しかし、これと同様に重要なのは、この解釈によれば、「二世界説」もまた解消できるということだ。と言うのも、今しがた述べたとおり、知識と思わくの対象の区別ということそのものが基本的に登場しないことになるからである。肝心なのはあくまで内容の真偽の区別になるのである。それゆえ例えば、「このトマトはこれこれだ」と知っているということは、プラトンにとって、その内容が真である限りは十分可能になる。「＜美そのもの＞はしかじかだ」と思わくしているということについては、その内容自体が真であれ偽であれ、可能になる。また、思わくの内容は或る場合には真であってよいのだから、そうした場合には、同じ「このトマトはこれこれだ」といった内容を知っていると同時に思わくしていることも可能になると言える――こちらの場合は、知識や思わくの内容が「このトマト」といった同一の事物に言及することになるが、こうした事物を知識や思わくの対象と呼べるならば、知識と思わくが同一の対象について成り立つことも可能になる。

さてしかし、こうしたFineの解釈による「二世界説」解消は、学者たちの間でどのように評価されているのであろうか。＜ある＞の翻訳に関する伝統解釈の批判をはじめとして、現状では、幾つかの問題が指摘されている。有力な批判者とされているGonzalezの1996年の論文に依拠して、ここでは、以下の二つの問題を紹介したい。

第一に、Fineは、存在的用法や述定的用法として「ある」を訳すと、議論が見物好きな

人々を説得する文脈にあるにもかかわらず、彼らに受けいられそうにない事柄が（2 節（3）で）前提されていることになる、と主張している。だが、その箇所の実際の文面は「もし何かが＜ありかつあらぬもの＞ならば…知識と無知の中間のものがそれに対応する」というものに過ぎない。それゆえ、「ある」をどう翻訳するにせよ、知識と思わくの対象が区別されるとか、後者の対象が現に「存在しかつ存在しないもの」ないし「P でありかつ P であらぬもの」であるといった前提は登場しないと考えられるのである。

第二に、美しい色や声などを喜ぶ見物好きな類の人々を相手にするという Text の文脈を考慮するならば、むしろ、＜あるもの＞と＜あらぬもの＞は知識と思わくの対象となる事物のことだと見なす方が適切だとも言える。と言うのも、Text に先立つ議論では、彼らが思わくしているだけだと主張しても見物好きな人々自身が納得しないという可能性が認められていたが、その理由は、見物好きな類の人々が、自分たちが見聞きしている色や声といった事物を知ってもいる、と考える人々だったからである。その彼らに対して、例えば知識の対象としての＜あるもの＞ということで、真なる命題（の集合）といったものを第一にイメージさせることは困難である。少なくともこの点では、Fine の解釈の方が、議論を相手に受け入れられないものにするおそれがある。

5.2 Gonzalez の解釈

こうした Fine の解釈に対し、伝統解釈を大筋で維持する別の立場から「二世界説」解消を試みたのが、Gonzalez である。彼は、伝統解釈のように存在的用法や述定的用法として「ある」を翻訳し、＜あるもの＞と＜ありかつあらぬもの＞を、それぞれ、知識と思わくの対象としてのイデアと感覚的・個別的な事物に結び付けて解釈する。そのうえで Gonzalez は、Text で知識と思わくは、Fine の言うような命題的な構造を持つものとしては論じられていない、とすることで「二世界説」を解消しようとした（Gonzalez, 1996）。

まずGonzalezによれば、Textにおける知識と思わくは、見物好きな人々の感性に合わせて、彼らの視聴覚という感覚知覚とパラレルな形式のものとして論じられている。Gonzalez はこの形式を見知り（acquaintance）と呼ぶ。彼によれば、こうした知識と思わくは、事物の一定のあり方（例えば、「美しい」）がどういうものかということを直観的に識別することであり、その内容は非命題的である。言い換えると、「Pであるもの」（見方を変えれば、「Pというあり方において存在するもの」[11]）であるイデアを対象として「Pとはこれのことだ」という内容を、見たり聞いたりするように直接的に、明晰に識別するのが知識であり、その同じ「Pとはこれのことだ」という内容を、「PでありかつPであらぬもの」（「Pというあり方において存在しかつ存在しないもの」）である感覚的・個別的な事物を対象とし

て曖昧に識別するのが思わくだということである[12]。

そしてGonzalezによれば、Textにおける知識と思わくは基本的にはこうした「見知り」形式のものに限られており、命題的な内容を持つものとしての知識と思わくといったものは論じられていない。ここに彼の解釈の重要な点がある。と言うのも、この主張が正しければ、実質的にFineと同様の仕方で「二世界説」を解消する（少なくとも、Fineが指摘したような問題を解消する）ことが出来るからである。何故ならこの場合、知識と思わくの命題的な内容の区別というものがTextに登場しないという限りで、Fineが言おうとした意味での対象の区別もなくなると言えるのだから。つまり、仮にここで論じられる知識と思わくの対象が区別されたところで、基本的にその知識と思わくは「このトマトはこれこれだ」とか「＜美そのもの＞はしかじかだ」といった命題的な内容を持つものではないから、こうした内容が言及する事物という意味で対象と呼べる「このトマト」とか「＜美そのもの＞」に関しても知識と思わくが区別されている、と考える必要はないということである。

では、こうしたGonzalezの解釈に対して、学者たちの反応はどうであろうか。現状では、こちらにも問題があると指摘されている。岩田の2009年の論文に依拠して、次の二点を紹介したい。

第一にGonzalezは、感覚知覚とパラレルな形式として、命題的な内容を持たない知識と思わくというものを考えようとしている。しかし感覚知覚ということで理解されるのは、通常、そうした形式のものに限られる必要がない。実際、それは一定の命題的な内容を持つ知覚判断として理解されてもよく、むしろそちらが自然だと言うことも出来る（例えば、赤という色を目で見る場合に、「それが赤い」と判断されること）。

そして第二に、＜あるもの＞と＜ありかつあらぬもの＞をイデアと感覚的・個別的な事物というイデア論特有の枠組みで区別することは、イデアを認めないとされるここでの相手、つまり見物好きな類の人々からは、一貫して受け入れられないと考えられるのである。

5.3 岩田の解釈

そこで第三の案として、岩田の解釈がある。岩田もまた、伝統解釈のように存在的用法や述定的用法として「ある」を翻訳し、＜あるもの＞と＜ありかつあらぬもの＞を、それぞれ知識と思わくの一定の対象であると見なす。しかし彼は、上でGonzalezに対して指摘した問題（前節末の段落を参照）と関連して、それらをイデアと感覚的・個別的な事物としてイデア論の枠組みで解釈することには反対する。代わりに岩田によると、＜あるもの＞と＜ありかつあらぬもの＞はそれぞれ、一言で言えば「端的にPであるもの」と「Pであったりなかったりするもの」である[13]。すなわち、例えば「美しい」というあり方につい

ては、＜あるもの＞とは「端的に美しいもの」のことであり、＜ありかつあらぬもの＞とは「美しくあったりなかったりするもの」のことである。そこで、例えば「端的に美しい花」のようなものがあるとすれば、たとえそれが感覚的・個別的な事物であるとしても、＜あるもの＞として知識の対象になることができる。他方で、＜美＞のイデアでさえ、捉えられ方によっては＜ありかつあらぬもの＞として思わくの対象にならざるをえない。岩田によれば、こうした知識とは「端的に美しいもの」を対象として「それが端的に美しい」という内容を認識・判断することであり、思わくとは「美しくあったりなかったりするもの」を対象として「それが美しくあったりなかったりする」という内容を認識・判断することである。この場合、イデア論の枠組みで区別されるイデアと感覚的・個別的な事物についても知識と思わくが区別されていると考える必要はなくなる。このようにして、岩田もGonzalezと同様、ここでの知識と思わくの対象の意味を考え直す(14)ことで、「二世界説」の問題を解消しようとする（岩田, 2009）。

岩田に見られるであろう解釈の特徴は、Text における知識と思わくが、或る種の対象と内容の両方に相関して区別されている、と考える点である。Fine は知識と思わくを、一定の命題的な内容を持つものとしてのみ区別されているとし、Gonzalez は逆に、基本的には非命題的な内容を持つものとしてのみ区別されているとした。岩田の解釈は、この両者とも別の立場から「二世界説」の解消が可能であることを示し、知識と思わくの対象と内容が、或る種の連動関係にあることを強く主張するものであると言える。

さて、岩田の解釈はごく最近のものであり、学者たちの反応は未だはっきりとしていない。しかし、Text に関する先行研究の中には、岩田の見解の一部に対して強く反対していると思われるものがある。参考のため、そちらを紹介しておきたい。

岩田は、＜あるもの＞としての端的に美しい事物の「美しい」と、＜ありかつあらぬもの＞としての美しかったりなかったりする事物の「美しい」を、事実上、同じ意味で「美しい」と言えると考えているようである。実際、彼は、二つの場合を分ける基準として明らかに、一方が「美しい」というあり方だけをしているのに対し、もう一方がその「美しい」というあり方に加えて、そうでないあり方もすることがある、という違いに注目している。過去に、こうした見解を問題視していたであろう学者として、田中がいる。田中は、「「ある」と「あらぬ」は、いわば白と黒のまだらになっているのであって、「ある」と「あらぬ」が一つになって灰色になっているのではなくなる」（田中, 1974, p. 26）とするような解釈一般に対して、強い反対を表明している(15)。と言うのも彼によれば、これでは「Pでありかつ Pであらぬ」ということが「完全にPでありかつ全くPであらぬ」ということと等しくなるけれど、「ありかつあらぬ」が「完全にある」と「全くあらぬ」を単に結びつけた

意味であるということはTextでは不可能だと考えられるからである。ここで反対される解釈のうちに、岩田の解釈も含まれていると言えるだろう。

6．結び

以上、『国家』Ⅴ巻の「二世界説」の問題について、その基本的な三点を見てきた。Textの伝統解釈においてプラトンは、知られる対象はイデアだけであり、思わくされる対象は感覚的・個別的な事物だけであるとする「二世界説」を認めていたと見なされてきた。私はまず、この事情の背景と、これに対してFineが指摘した「二世界説」の問題点を整理した。それから、「二世界説」をどのように解消できるかについての学者たちの考えを、Fine自身と、Gonzalez、岩田に注目して紹介してきた。

しかし最後に、これまでの内容を踏まえて問うてみたいことがある。それは、果たして今後「二世界説」解消のめどは立つのか、そしてそれ以上に、何故そのめどを立てなければならないのか、という疑問である。Fineが指摘した「二世界説」問題の解消という試みは、Fine自身から数えて数十年間続けられているが、決定的な成果が出ているとは言いにくい。それが今後出るかどうかも、予測はつかない。ここに及んで我々は、Fineがかつて指摘した「二世界説」の問題そのものの問題性については、従来あまり考察が行われていないことに注意すべきかもしれない。「二世界説」問題が何故問題なのかを問い直すことは、それ自体、プラトンの認識観や「哲人王」構想の複雑さに関わる有意義な試みでありうる、と私には思われる。とは言え、これ以上については、稿を改めなければならない。

註

(1) Fine(1978), p. 121およびFine(1990), p. 85に準拠。

(2) 例えば、Cornford(1941), pp. 175-176。

(3) 本稿が以下で扱う以外にも、近年の文献として、例えばSmith(2000)が知られている。

(4) Textにおいて、＜あるもの＞や＜あらぬもの＞の「ある」（オン）や「あらぬ」（メー・オン）は、しばしば「完全無欠に」（パンテロース、477a3）やその否定的対極の「メーダメー」（477a4）、あるいは共に「純粋に」（エイリクリノース、478e2-3, 479d5）といった副詞によって修飾されることがある。こうして修飾された＜あるもの＞や＜あらぬもの＞に関連させられる場合は、知識や無知にも「＜完全無欠にあるもの＞は完全無欠に知られるし、＜全くあらぬもの＞は全くもって知られえない」（477a3-4）のような修飾が用いられることがある。だがこうした修飾は、＜あるもの＞や＜あらぬもの＞を表現上＜ありかつあらぬもの＞からはっきり区別するものに過ぎないと考えられる。よって、本稿では基本的に省略する。

(5) Textにおいて、知識や思わくや無知は、前置詞「エピ」を用いて「～はエピ＋ｘ（ｘは与格）としてある」や「～はエピ＋ｘ（ｘは与格）として配される」と表されることがある。本稿では、これらの表現を「～はｘに対応する」や「～はｘに対応して配される」と訳し、こうした関係一般を対応と呼ぶ。

(4) 具体的には、知識は＜あるもの＞に対応しかつ＜あらぬもの＞にも＜ありかつあらぬもの＞にも対応しない、思わくは＜ありかつあらぬもの＞に対応しかつ＜あるもの＞にも＜あらぬもの＞にも対応しない、ということである。本節（４）～（８）を参照。

(7) Gonzalez(1996), p. 247に準拠。（１）と（２）で見られる「よって」の関係は、原文で明記されていない。

とはいえ、知識が＜あるもの＞に対応し無知が＜あらぬもの＞に対応することへの最初の言及（477a9-10）は、知っている人は＜あるもの＞を知っており、かつ＜あらぬもの＞は知られえない、という直前の同意（476e7-477a5）から導けるようなものと見なさない限り、不自然だろう。

(8) 該当すると言えるのは、例えば、Cornford(1941), pp. 175ff.、Allen(1961), p. 165、Cross and Woozley(1964), pp. 145ff.、Vlastos(1965), pp. 58-66。

(9) Fine(1990), pp. 85-86 に準拠。Fine(1978), p. 121 も参照。

(10) Fine以前にも、Crombie(1963)やGosling(1968)が似た解釈を支持していた。彼らも実質的には真理表示的用法として「ある」を翻訳する解釈をとり、Textの議論は知識と思わくの対象（少なくとも、通常の意味での）ではなく、Fineと同様の意味で内容を区別していると考えた。ただし彼らは、思わくの内容となる「真でありかつ偽であるもの」は、その一つ一つが部分的には真だが部分的には偽でもあるようなものだと考えた。これに対するFineの批判については、Fine(1978), p. 126 およびFine(1990), p. 89 を参照。

(11) Gonzlezによれば、ギリシア語「ある」における存在的用法と述定的用法は極めて強く結びついており、「(或る事物が)「存在する」という意味で「ある」と言うことは、常に同時に、それが「これこれである」と言うことでもある」(Gonzalez, 1996, p. 260, 強調筆者)。この点には、岩田, p. 44 も基本的に同意する。

(12) Gonzalezはまた、見知りとしての知識と思わくの対象も或る意味で全く別個ではない、という解釈を提出している。Gonzalez(1996), p. 257 やpp. 272-274 を参照。この点での彼の議論は曖昧であると言われているが、一つの見方として、小池(2007), pp. 210-211 と似たことを論じているようにも思われる。

(13) Annas(1981), pp. 209-211 も、これと似た解釈をしていると言える。

(14) こうした方針の古い例としては、Murphy(1951), pp. 116-118 を挙げられるだろう。

(15) 田中自身は、Gonzalezに近い考えを表していると思われる。

文献

Allen, R. E. (1961). 'The Argument from Opposites in *Republic V*', *Review of Metaphysics, 15*, 165-175.

Annas, J. (1981). *An introduction to Plao's Republic*, Oxford: Clarendon Press.

Cornford, F. M. (1941). *The Republic of Plato*, Oxford: Clarendon Press.

Crombie, I. M. (1963). *An Examination of Plato's Doctrines, 2,* London : Routledge & Kegan Paul.

Cross, R. C. & Woozley, A. D. (1964). *Plato's Republic: a philosophical commentary*, London: Macmillan.

Fine, G. (1978). 'Knowledge and Belief in *Republic* V ', *Archiv für Geschichte der Philosophie 60*, 121-39.

———(1990). 'Knowledge and belief in *Republic* V -VII', in S. Everson (Ed.), *Companions to Ancient Thought: 1*(pp. 85-115) , Cambridge: Cambridge University Press.

Gonzalez, F. J. (1996), 'Propositions or Objects? A Critique of Gail Fine on *Knowledge and Belief in Republic V*', *Phronesis 41*, 245-275.

Gosling, J. C. (1968), '*Doxa* and *Dunamis* in Plato's *Republic*', *Phronesis 13*, 119-30.

岩田直也(2009).「知の個別性と全体性——プラトン初期・中期対話編における技術と能力の対象概念について——」,『古代哲学研究紀要』, 第 15 巻, 26-50 頁.

小池澄夫(2007).『イデアへの途』, 京都大学学術出版会.

Murphy, N. R. (1951). *The interpretation of Plato's Republic*, Oxford: Clarendon Press.

SmithN. D. (2000). 'Plato on Knowledge as a Power', *Journal of the History of Philosophy 38*, 145-168.

田中邦夫(1974).「ΦΙΛΟΣΟΦΟΣ と ΦΙΛΟΔΟΞΟΣ の区別の基準としての ΓΝΟΣΙΣ と ΔΟΞΑ・その二」,『代哲学研究』, 第 5 巻, 21-33 頁.

Vlastos, G. (1965). 'Degrees of Reality in Plato', in *Platonic Studies* (pp. 58-75), Princeton: Princeton university Press.

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕